



中国按摩推拿医学の歴史 その一

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-05-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 李, 強, 大形, 徹 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004314

中国按摩推拿医学の歴史 その一

李 強
大 形 徹

目次

はじめに

一、導引・按蹻

二、按摩法と巫術

三、俞拊

四、按摩とその別称

小結

はじめに

手で疾病を癒すという手技療法（Manual Therapy）は、人類最古の医術であり、その起源は、そもそも人類の自己防衛本能によって生じたものと思われる。われわれの祖先たちは、その傷害を負った場合、無意識的に患部をなでたり按摩したりして、疼痛や不快感を和らげ、これらの行為により次第に手技の医療の経験を積んできたと考えられる。人間のこれらの本能的な模索実践の過程がまさしく中国按摩推拿医学（Traditional Chinese Anmo-tuina Medicine）¹の起源である。

古代には「拊」（『甲骨卜辞』234）、「按摩」（『靈枢』九鍼論）、「按蹻」（『素問』異法方宜論）、「喬摩」（『靈枢』病伝篇）などの名称が存在していたが、推拿という名称が最初に用いられたのは、明の万全（1495-1580）の『幼科發揮』と、同時代の龔廷賢の『小兒推拿秘旨』（1604）である。

一方、中国按摩推拿医学は日本の按摩、指圧、柔道整復療法の源である。

『日本書紀』允恭天皇に

三年春正月辛酉朔、使を遣して、良醫くすしを新羅に求む。秋八月、醫新羅まろいたより至れり。則ち天皇の病を治めしむ。未だ幾の時を経ずして病已に差えぬ。天皇歡びたまひて、

厚く醫^{たまもの}に賞して以て國に歸したまふ²。

とみえる。

允恭天皇の三年³の正月に良医を新羅に求め、八月に医がやってきて、天皇の病がほどなくなおった。そこで天皇は飲んで、その医に厚く贈り物をして新羅に帰した、という記事である。

ここには医の名は記されていないが、『古事記』では以下のようにみえる。

初^{はじ}め^{てんのう}天皇、帝位にお即^つきになろうとしました時に御辭退遊ばされて「わたしは長い病氣があるから帝位に即^つくことができない」と仰せられました。しかし皇后様をはじめ臣下たちも堅くお願い申しましたので、天下をお治めなさいました。この時に新羅の國主^{みつぎもの}が御調物の船八十一艘を獻りました。その御調の大使^なは名^なを金波鎮漢紀武^{こみばちにかにきむ}と言いました。この人が薬の處方をよく知っておりましたので、天皇の御病氣をお癒し申し上げました⁴。

ここでは、貢物を船八十一艘に積んでやってきた新良（新羅）の大使^{こみばちにかにきむ}、金波鎮漢紀武が薬方を深く知っていたため、天皇の病が癒えたとある。『日本書紀』が、わざわざ良医を新羅に求めたのとは、ニュアンスが異なっている。しかし、このとき、新羅から医薬に詳しい人物がやってきたことは間違いないと思われる。

『新撰姓氏録』には、欽明天皇⁵のときのこととして、「和薬使主（やまとのくすしのおみ）」という氏族名が記され、これは呉からやってきたとされている。ここでは田中卓校注『新撰姓氏録⁶』や佐伯有清著『新撰姓氏録の研究 本文篇⁷』をもとに考察する。

漢^{ヤマトノクサシ}…和薬^{ノオミ}⁸使主

呉^{クニ}の國^{コニキシ}の主、照淵⁹の孫、智聰¹⁰ヨイ^イ自^{アメクニオシハル}り出^{ヒロニハ}づ。天國^{スメラミコト}排開^ミき広庭^{ミツカヒオホトモ}の天皇^{サデ}（諡^{シタガ}欽明^{ナド}）の御世^モ、使大伴^ミの佐^サ比古^{デヒコ}¹¹に隨^{シタガ}ひて、内外典藥^{ナド}の書^モ¹²、明堂^{ミヤ}の圖等^モの百六十四卷^{ムソマリヨマキ}、佛^{ホトケ}の像^{ミカクヒトハシラ}一軀^{クレガク}、伎樂^{ウツハ}の調度^{ヒトソナ}一具^モ等^{マキレリ}を持^コて、入朝^{ゼムナノオミ}。男善^{アメオロゴトヨビ}那^{スメラミコト}使主^ビ。天萬^ミ豊^{ウシ}日^チの天皇^{チチマツ}（諡^{ヤマトノクサシノオミ}孝德^{イフカヒ}）の御世^ミに、牛^{ウシ}の乳^チを獻^{チチマツ}るに依^ヨりて、姓^{ヤマトノクサシ}和薬^{ノオミ}使主^{イフカヒ}を賜^{ワタ}ひき。度^{ワタ}し奉^{チチマツ}る本方^{フミヒトモイ}の書^{アマリ}一^{ミソマキ}百^{ヒトマキ}卷^{クサシ}、明堂^{ウスヒト}の圖^マ一^{クレガク}卷^{ヒトソナ}。藥^{イマオホテラ}の臼^ア一^アつ。及^アた伎樂^ア一具^アへは、今^ア大寺^アに在^アり¹³。

欽明天皇の時、照淵の孫、智聰が呉からやってきたという。これらの人物については不明である。しかし、注に記したように、照淵は梁の武帝、蕭衍（在位502-549）という説がある。その孫の智聰は梁の滅亡後、朝鮮に逃れた。そのあと、朝鮮で軍事行動をおこしていた「大伴佐豆比古（大伴連狭手彦）」にしたがって、日本にやってきたようだ。その際、朝鮮から、さまざまなものをもってきたとされている。注に記したように、「薬」は本草薬方、「明堂図」は針や脈の医学書と並べられるものとされている。

これらの記事には按摩のことはみえないが、薬や医学が朝鮮から日本にやってきた様子がうかがわれる。

後に、日本の遣隋使と遣唐使の制度化及び唐代医事行政制度の導入につれて、中国の按摩導引正骨術は日本に伝入された。典薬寮に按摩博士という官位があることがその有力な証である¹⁴。

『唐六典』卷十四、太医署

按摩博士、一人。又按摩師、按摩工を置き、これを佐く。消息導引の法を以て按摩生に教え、人の八疾、一に日はく風、二に日はく寒、三に日はく暑、四に日はく湿、五に日はく飢、六に日はく飽、七に日はく勞、八に日はく逸、を除く。凡そ人の支節腑藏積り疾生じ、導びきて之れを宣（の）ばし、内疾を留どまらざらしむれば、外邪入らず。損傷折跌する者の若きは法を以て之れを正す¹⁵。

この記載から、中国古代按摩博士の主要な職掌は按摩法、導引法、正骨法と固定法を用いて教授すること、古代按摩療法の治療範囲は慢性疾患の「八疾」と急性疾患の「損傷折跌」があること、治療手段は按摩・固定・正骨・導引と瀉血などであることがわかるであろう。このことから、中国古代正骨術は中国按摩導引術とともに日本に伝来したものだと思いたい。

現在、推拿は医師免許で行う医療行為として認められている。中国では、推拿に従事する専門医は、5年以上の専門医学教育を受け、鍼灸医や漢方医と同様に中醫師の資格を持っている。中国の病院では小児科、婦人科、内科、外科などと同様に診療科目に推拿科がある。推拿の基本手技26種類、応用手技500種類余りを中心に、漢方薬や西洋薬の投与、注射、手術、ハリなどと併用、あわせてレントゲン撮影、CT、MRIまたは血液・尿・糞便の検査や生化学検査などを診断手段として用いる。これが推拿医師の基本的な診療スタンスである。

推拿医学の特徴は、理論及び臨床のいずれの側面にせよ、その歴史の継続性、理論の

整合性、手技の多様性、操作の安全性、適応症の広範性、臨床上の即効性、教育上の高度性、流派の多岐性などが挙げられる。このため、推拿医学は近年、世界の代替医学または手技療法分野において脚光を浴びている。

ここで、按摩推拿医学の定義を定めてみよう。

按摩推拿医学とは、中医基礎理論に基づき、人体の体表にある経絡・腧穴や、患部にある筋肉・靭帯・関節などに、種々の按摩推拿手技を用いて、疾病を治療・予防する、中医外治法の一つであり、かつ按摩推拿の臨床応用と治療原理を研究する中医学の重要な一学問である。

拙稿は、文献書誌学及び訓詁学の角度から、中国按摩推拿医学とはなにかを考察することを目的とする。ただし、本研究は現行の『中華人民共和国執業医師法』『中華人民共和国中医薬法』を考慮しながら、「推拿医学」の同義語として、「按摩推拿医学」という呼称を使用する。また治療法としての「推拿療法」「小児推拿療法」及び「按摩療法」などの呼称を使用する。それから、古代中医学の大きな括りの中で、「按摩法」、「導引法」、「導引術」、「按摩術」、「正骨術」も使い分けることにする。

一、導引・按蹻

『呂氏春秋』古楽篇には、舞の起源として体を動かすことが述べられている。

昔、陶唐氏¹⁶の始め、陰氣多く滯伏（たいふ）して湛積し、水道壅塞（ようそく）し、其の原（もと）へ行（めぐ）らず。民の氣鬱閏（うつあつ）¹⁷して滯（とどこ）れるは、筋骨が瑟縮して達せざればなり。故に舞を作り為（な）し、以て之を宣（のば）し導かしむ¹⁸。

という。

陶唐氏（堯）の時代では、民の気が鬱積して滯り、筋骨が萎縮することを舞によって解消したというような記述である。これは必ずしも歴史的事実とはいえないが、後にこうした方法は「導引」と称され、次第に発展して医療行為のようになる。

「導引」という言葉は『莊子』刻意に最初に現れる。

吹呴（すいく）呼吸、吐故納新（とこのうしん）、熊經鳥申（ゆうけいちょうしん）するは寿の為（ため）にするのみ。此れ導引の士、形を養ふの人、彭祖（ほうそ）

寿考者の好む所なり¹⁹。

唐の成玄英は「道引」に以下の注を付けている。

神気を導引して以て形魄を養ふ。延年の道、形体を駐（とど）まらしむるの術なり²⁰。

ここでは、導引とは、神気を導き引くことだと述べ、それが形魄すなわち肉体を養う術であり、さらにそれが延年につながるという。

『黄帝内経素問』異法方宜論に、

中央は其の地平にして以て湿なり、天地の萬物を生ずる所以や衆（おお）し。其の民食雑にして勞せず、故に其の病は痿厥寒熱多し。其の治は導引按蹻に宜し、故に導引按蹻は、亦た中央より出づるなり²¹。

とある。

ここに「導引按蹻」とみえる。唐、王冰の注釈によれば、

導引とは、筋骨を揺（うご）かして、支節を動かすを謂ふ。按とは、皮肉を抑按するを謂ふ。蹻とは、手足を捷（はや）く挙（あ）ぐるを謂ふ²²。

とある。

ここでは導引は、筋骨および肢体を揺り動かすことであり、按は、皮や肉をおさえること、蹻は、手足をすばやく挙げることだとされている。

唐、『一切経音義』²³によれば、

凡そ人自ら摩（こす）り自ら捏りて、手足を伸縮させ、勞を除き煩を去るを名づけて導引と為す²⁴。

という。

仏教の經典の中の説明だが、こすったり、ねじったり、手足を伸縮させたりして、疲れを除き去るという。

1973年、中国長沙馬王堆3号漢墓から幅0.5メートル、長さ1.4メートルの帛に絵と文字が描かれている帛画が出土した。のちに「導引図」と称された。「導引図」には、44種類の導引動作図像が縦4列、横11種で黒の輪郭、朱・褐・藍・墨のベタ塗りで描かれているという²⁵。

「導引図」には、各種導引の具体的な姿勢を色彩で描いているばかりでなく、捶背、撫胸、按摩などの自己按摩の動作となされるものも記されている。これは、張家山漢簡の導引書『引書』²⁶とともに、中国に現存する最古の導引文献とみなされている。

『引書』では、110種類の導引術が記載され、病気を治すための術式は50種あり、その29種類が按摩法または徒手導引法に属していたという。『引書』は、漢代以前に実践していた導引法と按摩法の具体的なやり方、治療回数が詳しく記され、全面的に按摩・体操を融合した古来の導引法を描くものだと思われる²⁷。

ゆえに、広義の導引には、按摩法・体操法・吐納法²⁸が含まれ、狭義の導引は、按摩法や吐納法を含む体操的な運動（医療体操）である。

以上により、導引法は確かに中国按摩推拿療法を構成する部分の一つであると理解できるであろう。

按摩法と導引法は現代の中国按摩推拿医学の起源である。旧石器時代に初歩的な医療道具だと思われる砭石が制作、使用された。その後、殷から春秋戦国時代にかけて金針や九鍼が製作され、医療器具に発展した。九鍼²⁹は按摩（圓鍼、鑿鍼）・はり（毫鍼、長鍼、員利鍼、大鍼）・外科手術（鑱鍼、鈹鍼、鋒鍼）の道具である。この過程をみれば按摩療法は医学の起源と深く結びついている。

二、按摩法と巫術

巫には醫薬の経験や知識があり、巫術によって人々を治療した。前漢、馬王堆出土『五十二病方』にも巫の記載は多数ある。醫療行為に属した按摩法が祈祷法にも使われていた。

尤（疣）に曰く、疣には、敝（やぶ）れたる蒲（がま）の席（むしろ）若（も）しくは籍（しきもの）の翦（わか）きを取り、之れを繩（あざな）う。即ち其の末を燔きて、以て疣の末に灸（久）す。熱ければ即ち疣を抜きて之れを去る。…

一に、月晦の日の、日の下舖時を以て、塊の大なること鶏卵の如き者を取る。男子は七、女子は二七。先ず塊を室後に置きて、南北にせしむ。晦きを以て之の塊の所に往き、禹歩すること三、南方道（よ）り始め、塊を取りて言いて曰く、「今日、月晦なり。疣を北に磨る」と。塊を以て一たび磨り。已に磨れば、塊を其の處に置き、去りて顧ること勿かれ。大なる者を磨れ³⁰。

ここでは疣を「こする」という意味で「磨」が使われている。この「磨」は「按摩」の「摩」に通じる³¹。按摩法は当初は巫術の祈祷法の一つとしても使われていたのだろう。

三、俞拊

上古時代の晩期から殷、西周にいたる長い時期に、俞拊、巫彭、巫舛、巫咸、苗父等³²が巫醫として活動していた。按摩の歴史にも関わっている。俞拊（ゆふ）は岐伯（きはく）に並んで「兼彼數術者（彼の數術を兼ねる者）」とされ、いくつかの高度な醫術を兼修したとされる。

『周禮注疏』には、

岐伯俞拊、則ち彼の數術を兼ねる者なり。此の二人、大古に在りしこと、前説の如し。但し上の神農、子儀、扁鵲、倉公、秦和等は各おの一能を専らにす。此の二人、上の數術を兼ねるのみ³³。

とみえる。

岐伯は中国古代の有名な醫であり、按摩との関わりがあった³⁴。『漢書』芸文志第十、方技略、神僊には、『黄帝岐伯按摩』十卷」という書籍があり、岐伯に仮託して書籍が作られていたことがわかる。

一方、俞拊は俞拊ともいう。『淮南子』人間訓に

是れ猶ほ病者已（すで）に倦（つか）れて良醫を索（もと）むるがごときなり。扁鵲、俞拊の巧有りと雖も、猶ほ生かす能はざるなり³⁵。」

とある。

ここでは良医として、扁鵲と並べられている。

『漢書』芸文志、方技略、経方には「『秦始黄帝扁鹊俞拊方』二十三卷」とみえる³⁶。
ここでは、黄帝、扁鹊、俞拊と三名の名が並べられている。

俞拊については前漢の書物に記されている。

韓嬰の『韓詩外伝』巻十に

「中庶子曰はく、吾れ聞く、中古の醫を為す者、俞拊と曰ふ。俞拊の醫を為すや、木を榘（から）め脳と為し、芷草（よろいぐさ）を軀（からだ）と為し、九竅³⁷を吹き、脳を定め、死者を更めて生かさしむ³⁸。」

とある。

司馬遷は『史記』扁鹊倉公列伝³⁹において、

醫に俞拊有り。病を治すに、湯液、醴醢（らいり）⁴⁰、鑊石（ごんせき）⁴¹、摘引（きょういん）、案扞（あんかん）、毒熨（どくい）⁴²を以てせず、一たび撥（ひら）きて病の應を見る。五臓の輪（ゆ）⁴³に因りて、乃ち皮を割（さ）き肌を解（ひら）き、脈を決（わ）けて筋（すじ）を結び、髓腦を搦（から）め、荒（こう）⁴⁴を揅（おりたた）み、幕⁴⁵（まく）を爪（つか）み⁴⁶、腸胃を瀦（すす）ぎ浣（あら）いし、五臓を洗滌（せんでき）して、精髓を練り外形を易（か）ふ⁴⁷。

と述べている。

ここで注目されるのは、俞拊は病を治すに、湯液、醴醢、鑊石、摘引、案扞、毒熨をもちいないとされていることである。それらは扁鹊の関連の技術なのであろう。

韓嬰の『韓詩外伝』と司馬遷の『史記』の俞拊に関する醫療事績とよく似た記述は他にもある。

劉向の『説苑』巻八弁物に以下のようにみえる。

又た曰く、吾聞く、中古の醫を為す者を俞拊と曰ふ、俞拊の醫を為すや、髓腦を搦め、盲莫を束ね、九竅を炊灼して、經絡を定め、死人復た生人と為る、故に曰く、俞拊子の方、能く是（かく）の若きか、と⁴⁸。

『四庫全書』史部、正史類、『史記』巻一百五考證には、

「扁鵲乃ち弟子の子陽をして鍼を厲（と）ぎ石を砥（と）がしめ、以て外三陽五會を取る」は、『韓詩外傳』に曰く、「扁鵲入りて鍼を砥ぎ石を厲ぎ、三陽五輪を取り、先軒の竈、八拭の陽と爲す」と。『説苑』に、「軒光の竈、八成の湯を作る。子同は藥し、子明は陽に灸す」と。『説苑』「子容藥を搏（つ）け、子明耳を吹き、子游按摩し、子儀神を反（かえ）し、子越形を扶（たす）け、是（ここ）に於ひて世子復た生く」に作る、と。『周禮』疏に曰く、「按ずるに劉向云ふ、『扁鵲趙の太子の暴（にわ）かに疾（や）み尸麗するの病を治すに、子明をして湯を炊（た）き、子儀をして神を脉し、子術をして按摩せしむ』」と⁴⁹。

として、『史記』卷一百五のこの話が『韓詩外傳』や『説苑』と共通していることを指摘している。

なお、この『周禮』疏の中に子術が「按摩」をしたと見え、そこでは尸麗病を治療する方法の一つとされている。

また、ここで引かれる『説苑』は後半部分が省略されている。それを補ったものを以下に掲げる。

扁鵲遂に診を為すの先に、軒光の竈、八成の湯を造り、針を砥ぎ、石を礪ぎ、三陽五輪を取る、子容藥に禱り、子明耳を吹き、陽儀神を反し、子越形を扶け、子游矯摩す⁵⁰。

ここに「矯摩」がみえる。これは先にみた「按摩」と同様であろう。

これは『史記』扁鵲倉公列伝第四十五の「鑱石拈引、案杭毒熨」の「拈引」に似ている。ここにつけられた唐、司馬貞『史記索隱』は、

索隱、鑱、音、仕咸の反、石針を謂ふなり。拈、音、九兆の反、按摩の法を爲すを謂ふ、夭拈引身、熊顧鳥伸の如くするなり。杭、音、玩、亦た按摩して身體を玩弄し、調へしむるを謂ふなり。毒熨は病の處に毒するに、藥物を以て熨帖するを謂ふなり⁵¹。

とある。

「夭拈」は、「夭」は、身をくねらせること、「拈」は、まげる、ためる。「引身」は身を引くで、身体を引っばることだが、導引をさしているのではないだろうか。『索隱』

では、「拊」は「按摩の法をなすことをいう」とある。「拊引」は「矯摩」に似ており、「案拊」は「按摩」に似ている。

これらはいずれも扁鵲関連の医療である。そのため、愈拊の医療は按摩とは無関係のようにみえる。

後漢、班固（32-92）の『漢書』芸文志、方伎略には、

方伎なる者は、皆な生を生とするの具、王官の一守なり。大古に岐伯、愈拊有り。中世に扁鵲、秦和有り。（師古曰く、和は秦の醫の名なり）⁵²

とみえる。

この記述をみると、太古に岐伯・愈拊がおり、中古に扁鵲・秦和がいる。愈拊の方が扁鵲以前の人だとみなされている。唐の顔師古（581-645）の注によれば、秦和は、秦の医だとされており、扁鵲はそれに並べられているのである。

「拊」という文字

さきにもたように、愈拊という人物と按摩は無関係のようにみえる。しかし、愈拊の「拊」という文字は、じつは按摩と関わる文字である。

愈拊の「拊」は『説文解字』卷十二上に、

拊（ふ）は拊（な）づるなり⁵³。

とある。

段玉裁の注に、

拊（しゅん）は、摩なり。古、拊（ふ）拊に作り、今、撫（ぶ）循に作る、古今の字なり⁵⁴。

とみえる。

「拊拊」も「撫循」も同じだという。「拊」は形声文字であり、傍の部分は発音をあらわしている。

白川静の『字通』では、「〔説文〕十二上に「拊（な）づるなり」と訓する」と「なでる」意味でとっている。同書の〔訓義〕では、

1. なでる、さする。
2. うつ、たたく、はやくうつ、かるくうつ。

とされている。

〔古訓〕は

〔名義抄〕拊 ウツ・ナヅ 〔篇立〕拊 タツ・ヒク・ナヅ・ウツ・タバス・ツク・
タ、ク・ハク・イタム

で、やはり、なでたり、うったり、たたいたりすることをいう。

白川は、発音の類似からも以下のようにいう。

〔語系〕に

拊phio、撫phiuaは声近く、手でなで、かるくうつ動作をいう。

とみえる。

つまり、「拊」は按摩の意味に近い。

『大唐西域記』巻六、室羅伐悉底國⁵⁵には

我れ今、汝を看、手を以て拊摩（ふま）して、病の苦は皆な癒ゆ⁵⁶。

とみえる。

この場合の「拊摩」は按摩の意味だが、そこに愈拊の「拊」が使用されている。

愈拊の名は本名というよりも、按摩に長けた者を、そのように称したのではないだろうか。

「拊」に関する文献は、さきにも少しとりあげたが、ここではもう少し詳しくみたい。

『靈樞』経筋十一に、

卒口僻⁵⁷、急なる者は目は合（と）じず、熱あれば則ち筋縦（ゆる）みて目開かず。
頬筋に寒有れば、則ち急（にわ）かに頬を引き口を移す。熱有れば則ち筋弛縦（ゆる）み、緩なれば収に勝（た）えず、故に僻す。之れを治すに馬膏を以て其の急な

る者に膏（あぶらつ）く。白酒を以て桂に和し、以て其の緩者に塗（ぬ）り、桑鉤を以て之を鉤（とど）む。即ち生桑炭を以て之を坎（あな）の中に置き、高下、坐を以て等（ひと）しくす。膏を以て急頰に熨（の）して、且つ美酒を飲み、美炙食を噉（くらわ）しむ。酒を飲まざる者は自ら強（つと）め、これを為すこと三たび拊するのみ⁵⁸。

とある。

現代医学でいう顔面神経麻痺のような急性疾患に対して、まず、顔の歪み側（健側）と緩み側（患側）を分ける。それぞれ、「寒」と「熱」を当てはめて、別々の治療法を行ったという。

馬の脂肪からできた「馬膏」および白酒・桂・生桑炭・美酒・炙食を用い、「膏摩法」、「塗法」、「熨法」、「飲酒」、「美味しくかつ熱い食を食わせる方法」を総合的に施した。

最後に酒を飲めない者に対して「自強（我慢）」させながら、患部に「為之三拊」を行ったということになる。ここに「拊」がみえる。「為之三拊」はある種の按摩麻酔のような鎮痛効果があるのだろう。

なお、司馬遷の『史記』扁鵲倉公列傳に

菑川（しせん）王病み、臣意を召し脈を診て曰く、「蹶の上を重と為し、頭痛身熱、人を煩懣せしむ」と。臣意は即ち寒水を以て其の頭を拊（う）つ。足陽明脈、左右各おの三所を刺さば、病みは旋（たちま）ち已（や）む⁵⁹。

と「拊」の使用例がみえる。

これは、扁鵲と並べられる前漢の名醫、淳于意（倉公）が「寒水拊頭」という按摩法を用いた一例である。

この場合は寒水を注いで頭を拊（う）つことであり、手ではない。しかし、この表現により、「拊」が按摩法の一つであったとわかる。

四、按摩とその別称

ここでは、按摩とその別称について考察する。別称とはいうものの、まず「按摩」という語があって、それが変化したというわけではない。

そのため、成書年代を基準にして並べてみよう。おそらく、もっとも古いものは「折

枝（戦国『孟子』）であり、続いて「毗胝（『莊子』雜篇、外物）」、「按摩（前漢、韓嬰撰『韓詩外伝』）」、「矯摩（前漢、劉向『説苑』）」、「摳引（前漢、『史記』）」、「按摩（『黄帝内経素問』）」、「按躄（『黄帝内経素問』）」、「喬摩（『黄帝内経霊枢』）」、「摩摳（後漢、劉熙『釈名』）」ぐらいではないか。成書年代が不明のものも多いため、大まかな並べ方である。

「按摩」の語は、『黄帝内経素問』にはじめてみえる。この書名は『漢書』芸文志にみえ、漢代にこの書があったことは確かだが、現今のものは、そのままではない。かりに漢代であったにしても、『孟子』の方が古いということになる。『孟子』の時代には、まだ「按摩」という語はなかった。それなのに『孟子』で「折枝」と呼ばれていたものを「按摩」と解する説がある。

折枝

『孟子』梁惠王上に、

曰く、「為さざる者と能はざる者の形は何を以て異なるや」と。

曰く、「太山を挾（わきばさ）み以て北海を超ゆ。人に語（つ）げて曰く、『我れ能はず』と。是れ誠に能はざるなり」と。長者の為に枝を折る。人に語げて曰く、『我れ能はず』と。是れ為さざるなり。能はざるに非ざるなり。故に王の王たらざるは、太山を挟み以て北海を超ゆるの類に非ざるなり。王の王たらざるは、是れ枝を折るの類なり」と⁶⁰。

これは孟子と梁の恵王との対話である。最初の「曰く」は、恵王である。孟子に「しないのと、できないのとは、どこが異なるのか」とたずねた部分である。その答えのなかで、まず、できないことの例として、「太山（泰山）」を小脇にはさんで、北海をとびこえる」があげられ、できることの例として、「長者の為に枝を折る」があげられている。

漢、趙氏注、宋、孫奭音義并疏、『孟子注疏』卷一下、梁惠王章句上の趙岐の注によれば、

注、孟子、王の為に為すと為さざるとの形を陳（の）ぶ、是の王の若きは則ち枝を折らざるの類なり、「折枝」は、案摩、手節を折り、罷枝を解するなり。少き者は是の役を恥ず、故に為さざるのみ。能はざるに非ざるなり⁶¹。

とみえる。

趙岐の注は、「折枝、案摩、折手節、解罷枝也（「折枝」は案摩、手節を折り、罷枝を解するなり）」である。アンダーラインを付したように、「折枝」を「折」と「枝」の二つに分けて説明している。

「案摩」は「按摩」、「手節」は手の関節、「罷枝」は「罷肢⁶²」であろう。「枝」は『四書弁疑』に「枝與肢通（枝は肢と通じる）」とあることから、「肢」と通じる。そう解釈すれば、「折枝」は按摩、手の関節を折りまげ、罷（つか）れた肢体をほぐすと解釈できそうである。

宋、孫奭（962-1033）撰、『孟子音義』卷上には、

陸善經云ふ、「枝を折るとは、草、樹の枝を折るなり」と⁶³。

とみえる。

唐、陸善經の説によれば、「折枝」は草や樹木の枝を折ることだという。

南宋、朱子の『孟子集注』は、

長者の爲に枝を折るとは、長者の命を以て、草木の枝を折る、難（かた）からざるを言ふなり⁶⁴。

とある。

これは草木の枝を折るということで、陸善經の説に似る。「折」には「折は誓と声義の通ずる字。草木などを折ることが、誓約に関する行為であった⁶⁵」と、「折」と「誓」は意味が通じる。別れの際に「折柳」と柳の枝を折ることに通じるように思われる。これについては後に取り上げる。もし、そうだとすれば、枝を折ることは、そのこと自体は簡単なことであっても、「誓い」につながる意味をもつ行為であったと考えることも可能であろう。

元の陳天祥撰『四書辨疑』卷九、孟子、梁惠王上は上にあげたものとは異なり、礼儀の作法だとする解釈である。

舊説、長者の爲に手節を按摩す、と。此れ枝を以て肢體の肢と爲す、と。字義是に本づく。然れども所謂、手節を按摩するは、事却って迂僻、亦た取る可からず。長者の爲に肢體を屈折するは、止（た）だ是れ卑幼の尊長に於けるや、常に用ひ易（た

やす)く之れが禮貌を爲すのみ。手を斂(おさ)め膝を屈し、腰を折るの類、皆な其の長上に事ふるの禮なり。説く者、宜しく枝と肢と通用すと云ふべきも、枝を折るは肢体を斂折すること、手を斂め腰を折り、長者の爲に禮を作すが如きを謂ふなり。此れ徐むろに行きて長者に後(おく)ると、意正に相ひ類す。皆な爲すを難(かた)しとせざるを言ふなり⁶⁶。

まず、長者のために手や関節を按摩するという旧説をしりぞける。「枝」を「肢」と解釈すること自体は正しいと認める。しかし、これはきちんとした手つきで自らの腰をおって、つまり肢体を折り曲げて、礼儀正しく長者にお辞儀することだという。そしてこれは長者の後ろをゆっくりとあるくという『孟子』にみえる礼儀とも似ているという。わかりやすい説である。

「枝」は「肢」に通じ、肢体を按摩するという注釈をする書物は多い。たとえば、清、陳祖范『経咫』は、

長者の爲に枝を折る、古注に折枝を以て按摩と爲し、枝は肢體の肢と同じ、とす。今、朱注以て樹枝の枝と爲す、虚言もて譬えを「難からず」の意に取ると雖も、尤(はなは)だ淺顯(せんけん)爲(た)り。但だ、「爲長者(長者の爲に)」の三字に於いて全く意義無ければ、宜しく古に従ふべきが似(ごと)し⁶⁷。

と述べる。

ここでは朱子の「樹枝の枝」という説を「淺顯」と罵っているが、その理由は、そのことが「爲長者(長者の爲に)」ということに全く結びつかないからだという。そして古注の按摩の説にしたがうべきだという。朱子の原文は「折草木之枝」であるため、ここで「樹枝之枝」として引用するのは学者の態度としては適切ではない。

枝を折る例としては、「折柳樊圃(『詩経』国風 齊 東方未晞)」があり、『三輔黄図』卷六、橋の「折柳」の例では、

三輔黄図、六、橋：霸橋は長安の東に在り。水に跨して橋を作る。漢人、客を送るに、此の橋に至り、柳を折りて別るるものに贈る⁶⁸。

とみえる。

ここでは別離に際して、橋のところで柳を折って去りゆく人に送ることが記されてい

る。このことは、このあとも習慣化され、多くの詩文に記されている。柳を折ることの意味については、明らかではないが、さきにも考察したように、「折」が「磬」に通じるとすれば、たんに植物の枝を折ることにはならない。

陳祖范は結局、古注の按摩の説がよいといっている。

清、程大中撰『四書逸箋』もまた朱子の説を否定する。

折枝は、陸氏の『善經』は「草樹の枝を折る」と謂ふ。『集注』之れに従ふも、長者の爲にすと、意、殊（こと）に屬せず。趙氏注に、「按摩は、手節を折り、罷枝を解くなり」と。亦た力を費す。陸筠云ふ、枝、肢は古へ通用す。磬（けい）のごとく腰、肢を折りて揖（ゆう）するを謂ふなり⁶⁹。

という。

また、趙岐の按摩の説に対して、「亦た力を費やす」と、これは労力が必要で簡単なことではないと否定する。そして最後に、南宋の陸筠の「磬折腰肢（磬のごとく腰、肢を折）りて揖す」という説を紹介する。これは陸筠の『翼孟音解⁷⁰』の説であろう。

「磬折」は「磬折」と同じである。「磬」は楽器の「うちいし」のことであるが、真ん中で折れ曲がっている。『礼記』礼記、曲礼下に「立つときは則ち磬折して佩を垂る⁷¹」とみえ、立っているときに磬のように身を折り曲げておこなう礼のことである。この「磬折」に「腰肢」という語を付け加えて「磬折腰肢」とし、読み方は、「磬のごとく腰、肢を折りて」とした。「揖」は、手を胸のところにあてて、おじぎすることである。要するに、肢体を折り曲げて礼をすることになる。これは陳天祥の説と同じである。

清、張玉書、陳廷敬等編『康熙字典』（1716）辰集中・木部・枝⁷²は、「枝」についての何種類かの解釈を示すが、そのうちの 하나가以下である。

又た手節を枝と曰ふ。『孟子』に「長者の爲に枝を折る」と。趙岐の注に、「折枝は案摩、手節を折る」と。

とみえる。

本来の趙岐の注は、「折枝、案摩、折手節、解罷枝也」であり、アンダーラインを付したように「折枝」は「折」と「枝」の二つに分けて説明される。「枝」は「肢」の意味である。ところが、『康熙字典』引用の趙岐注では肝心の「解罷枝」の部分が省略され、「折枝、案摩、折手節」だけとなっている。「折手節」だけでは「折枝」の「折」の部分

の説明にしかならない。「枝」という項目であるにもかかわらず、「枝」の部分が、ぱっさりと切り落とされてしまっているのである。

「又手節曰枝」という説明も、このままでは「枝」が「手節」ということになるが、『孟子』の注をみても、そのようなことは書いていない。要するに『康熙字典』の説明では意味不明ということになり、この編纂にかかわった学者のレベルを疑わせるものになっている。ただ、この中に「案摩」の語が引用されている。

以上、折枝には、

- ①按摩（長者の肢体を折り曲げる）（漢、趙岐、清、陳祖范、『康熙字典』）
- ②枝を折る（唐、陸善経、南宋、朱熹）
- ③お辞儀（自分の肢体を折り曲げる）（元、陳天祥、清、程大中）

という、三種の説があることになる。

ただ、さきにも述べたように、『孟子』の頃には、まだ「按摩」という言葉はなかったと思われるため、「折枝」を「按摩」だと断言する言い方には違和感を感じる。

眦滅

『莊子』外物篇に

静然（せいぜん）たるは以て病（やまひ）を補（ほ）すべく、皆滅（しめつ）は以て老を休（や）む可く、寧（やすら）かなるは以て遽（きょ）を止む可し⁷³。

とみえる。

この眦滅については、いくつかの説がある。一つは情欲を除く、もう一つは、髪を切り、状貌を滅すというものである。また、積む、そして、さらにもう一つが按摩という説がある。

「擧」は後漢、許慎撰『説文解字』卷十二上に、

積むなり。詩に曰く、「助我擧擧」。頰の旁を滅するなり、手に从ひて此聲、前智の切⁷⁴。

とみえる。

ここでは「積む」という解釈を示し、それが『詩経』の句に相当するという。そのあとの「**搯**頰旁也」というのは、このままでは、前の部分との繋がりがよくわからない。これについては、南唐、徐鍇撰、『説文繫伝』卷二十三、通釈に、

積むなり、手に从ひて此聲。詩に曰く、「助我舉**擧**」と。一に曰く、「頰の旁を**搯**（な）づるなり」と⁷⁵。

とみえる。

ここでは、「一曰」という句が補われている。そのため、一説にこうある、ということがわかる。「**搯**」には、する、にじる、という訓がある。また「**擧**」に通じるというところから、「なづる」と訓じた。

『原本廣韻』卷五、入聲、薛、減では、

搯は、手もて抜く、又た摩なり、批なり、揜（う）つなり⁷⁶。

「手もて抜く」は、このままでは、意味がわからないが、眉や髪を抜くことのようにある。漢、史游撰、『急就篇』卷三、「**搯**搯」の唐顔師古の註に、

搯搯とは、眉髪を**鬣**（そ）り抜くを謂ふなり⁷⁷。

とある。

眉や髪を剃（そ）ったり抜いたりすることで、按摩とは無関係である。

「**擧**也、**批**也、**揜**也」の三つが按摩と関連する。「**擧**」は按摩の擧である。「**批**」は、手偏に「**比**」ではなく、手偏に「**此**」の誤りであろう。つまり、「**批**」である。「手」が下にくれば、「**擧**」になる。「**擧**」については、先に考察した。

その場合は「按摩」の意味になる。『正字通』眈に「**按**」という説がみえ、『説文通訓定声』では、「**擧**、**按**、**批**、疑ふらくは同字」とみえ、「**擧**」、「**按**」、「**批**」の三つの文字は同じ字だろう、とする⁷⁸。つまり、「按摩」の「**按**」に通じるという説である⁷⁹。

「**眈**」には、「まなじり」の訓があるが、ここではその意味ではない。

ところが、宋、褚伯秀撰『南華真經義海纂微』卷九十、雜篇外物第四、「静然可以補病、

眥⁸⁰可以休老、寧⁸¹可以止遽」の注に、

『真誥』に云ふ、時に手を以て目の四眥を按ずれば、光を見ること分明ならしむ、是れ眼神を検するの道、久しく之れを為さば、百靈老形の兆を見ること、目眥に發す。皺紋を披⁸²すれば、以て老容を沐浴す可し⁸⁰。

とみえる⁸¹。

手で目の四つの眥 (=眦、まなじり)⁸²を按すと、光がはっきりと見え、長く続けると、百靈老形つまり人ではない魑魅魍魎の類いがみえるという。また眥の皺を伸ばすと、若返るという。

『真誥』の作者は、梁の陶弘景であり、道教の学者である。ここの効果の中にも道教の要素がみてとれる。『南華真經義海纂微』の『南華真經』とは『莊子』のことである。ここは『莊子』の注の中に陶弘景の説を引用して、『莊子』を解釈しようとしていることになる。

ところが、『真誥』卷九、協昌期第一は、

手を以て目の四眥を按ずること二九過なれば、光を見ること分明ならしむるを覺ゆ、是れ眼神を検するの道、久しく之れを為さば、百靈を見るを得⁸³。

である。

まなじりをおさえるということで、確かに按摩法である⁸⁴。しかし、『真誥』の該当箇所には『莊子』は引用されておらず、この部分は本来、『莊子』の注釈ではない。また、さきにみた『南華真經義海纂微』に引用された『真誥』は、本来の『真誥』の該当箇所よりも文が長くなっている。それは、『莊子』の注釈として使用するために、後半部分が付け加えられたようにみえる。

明、焦竑撰『莊子翼』の焦氏筆乘は、この部分を引用している。原文のみあげると、

按『真誥』云、時以手按目四眥、令見光分明、是檢眼神之道、久為之、見百靈老形之兆、發於目眥。披皺紋可以沐浴老容。

である。

これは宋、褚伯秀撰『南華真經義海纂微』と一字一句違わない。そして『真誥』の原文とは同じではない。これは『莊子翼』が『真誥』の原文を確認せず、『南華真經義海纂微』からそのまま引用したことを疑わせる。その結果、『南華真經義海纂微』の引く、原文とは異なる『真誥』の説が、『莊子翼』に載せられたことになる。

そして清、『康熙字典』女部、媛には、目と関連する説が紹介されている。

皆媛、又た媛と通ず。按なり摩なり。『莊子』外物篇、「皆媛以て老を休む可し」と。註に「兩手を以て目の四皆を按さば、眼神をして光明ならしめ、皺紋を按媛すれば以て老容を沐浴す可し」と⁸⁵。

とある。

ここでは「註」とある部分に『南華真經義海纂微』所引の『真誥』にもとづく部分が簡略化されて紹介されている。しかし、その後半の「按媛皺紋、可以沐浴老容」の部分は本来の『真誥』にはなかったものである。

以上の考察を簡単な表にまとめた。継承関係は、直線のアンダーラインと波線のアンダーラインで示した。

書名	該当部分	備考
梁、陶弘景『真誥』	<u>以手按目四眇二九過、覺令見光分明、是檢眼神之道、久為之、得見百靈。</u>	『南華真經義海纂微』以下の書物と共通する部分にアンダーライン
宋、褚伯秀撰『南華真經義海纂微』所引『真誥』	『真誥』云、時以手按目四眇、令見光分明、 <u>是檢眼神之道、久為之、見百靈老形之兆、發於目眇、按媛皺紋、可以沐浴老容。</u>	波線のアンダーラインは本来の『真誥』にないが、以下の書物に引き継がれる。
明、焦竑撰『莊子翼』の焦氏筆乘	按『真誥』云、時以手按目四眇、令見光分明、 <u>是檢眼神之道、久為之、見百靈老形之兆、發於目眇、按媛皺紋、可以沐浴老容。</u>	『南華真經義海纂微』に同じ。
清、『康熙字典』	媛媛、又與媛通。按也摩也。『莊子』外物篇、媛媛可以休老。註以兩手按目之四眇、令眼神光明、 <u>按媛皺紋、可以沐浴老容。</u>	波線の部分は『南華真經義海纂微』にもとづく。

つまり、『康熙字典』の中に、本来の『真誥』ではなく『南華真經義海纂微』にもとづく部分が『莊子』の注として紹介されたということになる。

馬叙倫(1884-1970)の『莊子義証』は、まず「背^背滅^滅可以休老」に小文字で以下のよ
うな注釈をつける⁸⁶。

『玉篇』は「背^背滅^滅」を引きて「揃^揃滅^滅」に作る。闕誤なり。張君房本を引きて沐を休
とす⁸⁷。

とある。

そのあと、

陸徳明曰く、「背^背、本亦た揃^揃に作る。滅^滅、本亦た滅^滅に作る」と。奚侗曰く、「背、疑
ふらくは擧^擧の誤り爲り。『説文』、揃^揃は、滅^滅、擧^擧なり。揃^揃、擧^擧は義同じ。因りて擧^擧誤
りて背と爲すのみ」と。倫案ずるに、『説文』に曰く、「滅^滅は批^批なり、批^批當に擧^擧に作
るべし」と。擧^擧の下に曰く、「一に曰く、『頰の旁を滅^滅(す)るなり』と」と。即ち
擧^擧を借りて揃^揃と爲す、同に齒音なり。揃^揃、滅^滅、義を同じくす。『玉篇』に曰く、「揃^揃
は滅^滅なり。滅^滅は磨^磨なり」。是れ揃^揃、滅^滅は即ち今の按摩術なり。成玄英の疏に曰く、「衰
老の容、此を以て沐浴す」と。是れ成本、休を沐に作るも、休の字^休是なり⁸⁸。

とする。

馬叙倫は、「擧^擧」は「揃^揃(さする)」と同じで、「揃^揃」、「滅^滅」は今の按摩術だとしている。
つまり、「擧^擧」も「滅^滅」も按摩の意味だとする。

池田知久の『莊子』も「背^背滅^滅可以休老」を「按摩・指圧をやれば老化を防ぐことが
できる」と訳す。これは「按摩」の意味でとらえている。

ここで、『莊子』の注釈の経緯をあらためてまとめてみよう。『真誥』では、「目の四
背^背を按す」と、背^背(まなじり)を按す按摩のことが説かれていた。当時、そのような按
摩術があったのだろう。ただし、『真誥』のこの部分は『莊子』とは無関係である。

その後、宋、褚伯秀撰『南華真經義海纂微』が『莊子』の注釈として『真誥』のこの
部分を引用した。なおかつ、もとの『真誥』にはなかった「披^披滅^滅皺^皺紋^紋、可以沐浴」の部
分が付加されている。付加された文章が何に基づくのかは不明であり、探し当てること
ができなかった。褚伯秀が作文した可能性もあるだろう。「披^披滅^滅皺^皺紋^紋、可以沐浴」が付
加されることによって、あたかも『真誥』が『莊子』のこの部分の注を書いたようにみ
えてしまうのである。この文は、そののち、明、焦竑撰『莊子翼』の焦氏筆乘に引用さ
れる。そしてさらに『康熙字典』に、『莊子』の注として引用されることとなる。そこ

では、背(まなじり)を按ず按摩である。

ただし、『莊子』の原文は「背滅」である。これは「背滅」に通じる。もし「背滅」が「滅背」という語順であれば、「背を滅(す)る」、つまり、「まなじりを按摩する」と読める。けれども、そのような語順のものはない。そのため、『莊子』の原文を「まなじりを按摩する」と読むことは不可能ということになる。

馬叙倫の説は、「まなじりを按摩する」ことではない。「背」を「揃(さする)」と理解するもので「背滅」を按摩術と理解している。

なお、「休老」という語は、『莊子』以外にも『礼記』にみえる。その後、よく使われる語である。よく似た言い方で「休勞」という語がある。これは前漢、桓寬の『塩鉄論』卷九、擊之第四十二にみえる。しかし、「老」と「勞」は現代語では同じ発音だが、古典では異なる。「老」は『広韻』盧皓切『集韻』『韻会』『正韻』魯皓切であり、「勞」は『唐韻』魯刀切『集韻』郎刀切並音牢である。

按摩・按摩

さきにもとりあげたが、前漢、韓嬰撰『韓詩外伝』卷十に、

扁鵲入り、鍼を砥ぎ石を礪ぎ、三陽五輸を取り、先軒の竈、八拭の陽を為し、子同、薬し、子明、陽に灸し、子游按摩し、子儀、神を反(かへ)し、子越、形を扶(たす)け、是に拏ひて世子復た生く。天下之れを聞き、皆な以(おも)へらく扁鵲能く死人を起こすなり、と⁸⁹。

とみえる。

ここに「子游(游、按摩し)」と「按摩」という語がみえる。「摩」ではなく「磨」である。これは音通による仮借であろう。扁鵲を中心として、子同が薬、子明が灸、子游(游)が按摩、子儀が反神、子越が扶形というように役割を分担して複数で医療が行われていたことがわかる。

なお、この文はさきにも考察した『説苑』などに類似の文があり、用いられる語句に多少の異同がある。

それらを簡単に表にまとめてみると、

	子同	子容	子明	子游	子儀	陽儀	子越
『韓詩外伝』	葉	／	灸	按摩	反神	／	扶形
『説苑』	／	椿葉	吹耳	矯摩	／	反神	扶形

「子游（『韓詩外伝』）」と「子游（『説苑』）」は異体字で同一のため、表では「子游」とした。「子同（『韓詩外伝』）」と「子容（『説苑』）」は字形が近い。本来、同一であったのだろう。「子明」は両書で共通するが、「灸（『韓詩外伝』）」と「吹耳（『説苑』）」で、内容はかなり異なる。「耳を吹く」ことは、晋、葛洪撰『肘後備急方』卷一、救卒中惡死方第一に「吹耳」とみえ、蘇生させる方法とされている。「子游」も両書で共通するが、「按摩（『韓詩外伝』）」と「矯摩（『説苑』）」で文字が異なっている。「子儀」と「陽儀」は同一人物であろう。「反神」は共通。「子越」も共通し、「扶形」も共通する。

『韓詩外伝』と『説苑』の記述は、全く同様とはいえないものの、よく似ている。そのため、この比較表によって、「按摩」と「矯摩」が、ほぼ同様の意味で使用されているのではないかとといえる。「矯摩」については、「**矯引**」の項で考察する。

『漢書』芸文志には、

黄帝岐伯按摩十卷

とみえる。

ここに「按摩」の文字があらわれ、それは黄帝と岐伯が説いたという形になっている。

『漢書芸文志考証』には、

『黄帝岐伯按摩』十卷

『唐六典』、「按摩博士一人」と、注に、崔寔の『正論』に云ふ、「熊經鳥伸、延年の術、故より華佗に六禽の戯有り、魏文に五**撻**の鍛有り」と。『僊經』に云ふ、「**戸**樞朽ちず、流水腐らず、とは、骨節を調利し、血脉を宣しく通ずべからしめんと欲するを謂ふ（『韓詩外傳』に、「扁鵲鍼を砥ぎ石を厲き、子游按摩す」と）、『周禮疏』案ずるに、劉向云ふ、「扁鵲、子術をして案摩せしむ」と⁹⁰。

とみえる。

『漢書』芸文志の記述は『黄帝岐伯按摩』十卷という書名のみである。この書物は亡失しており、その佚文もなく、内容は不明である。

『漢書芸文志考証』は『唐六典』を引き、唐代には按摩博士が一人おかれたことを記す。また『周禮』疏を引き、「案摩」の語があったことを紹介する。また、『韓詩外伝』の「扁鵲が鍼を砥ぎ石を厲き、子游が按摩した」という内容が記される⁹¹。

また、『黄帝内経素問』巻七、血氣形志篇第二十四に、

形樂しく志苦しきとき、病、脈に生ず、之れを治するに灸刺を以てす。形樂しく志樂しきとき、病、肉に生ず、之れを治するに鍼石を以てす。形苦しき志樂しきとき、病、筋に生ず、之れを治するに熨引を以てす。形苦しき志苦しきとき、病、咽嗑に生ず、之れを治するに百葉を以てす。形數しば驚恐し、經絡通ぜず、病、不仁に生ず、之れを治するに按摩醪藥を以てす。是れを五形の志と謂ふなり⁹²。

とみえる。

この内容を簡単な表にまとめた。

	形	志	病	治	備考
1	樂	苦	脈	灸刺	
2	樂	樂	肉	鍼石	
3	苦	樂	筋	熨引	
4	苦	苦	咽嗑	百葉	
5	數驚恐		不仁	按摩、醪藥	經絡不通

1～4までは比較的バランスよく配置されている。「形」と「志」は「樂」と「苦」に分類され、脈、肉、筋、咽嗑もまずまずの分類である。

ところが、5では極端にバランスが悪くなっている。「按摩、醪藥」とされているが、「按摩」と「醪藥」はまったく別のものである。「醪」は、にごり酒である。白川静は「醪藥」を「酒葉」としている⁹³。「按摩」と「醪藥」は本来、別項目であったのではないか。もし、そうだとすれば、「數しば驚恐す」も、「驚」が按摩に、「恐」が「醪藥」に配当されるのではないだろうか。

「按摩」と「醪藥」を別項目だと考えれば、本来、六つに分かれていたと考えるべきなのだろう。それを医学の書によくみられる五行の配当にあわせて、無理に五つに押し込めたような印象がある。

「經絡不通」が、5に配当されている。これによって「按摩」が經絡の体系のなかにあるということがわかる。しかし、1の「灸刺」、2の「鍼石」も当然、經絡の体系の

なかにあるわけなので、この分類もいまひとつ整理されていない印象がある。しかしながら、「按摩」が各種の治療法と並列され、それが「経絡」の体系のなかにあるとする考え方をここで確認することができるのである。

『黄帝内经素問』卷十七、調経論篇第六十二にも「按摩」がみえる。

帝曰刺微奈何。岐伯曰按摩勿釋、著鍼勿斥、移氣於不足、神乃得復。

帝曰、「微を刺すは奈何」と。岐伯曰、「按摩して釋する勿かれ、鍼を著け斥する勿かれ、氣を足らざるところに移さば、神乃ち復するを得」と。

この部分の注釈は、

其の病處に按摩し、手、釋散せず、鍼を病處に著け、亦た之れを推さざれば、其の人の神氣をして鍼に内朝せしむ。其の人の神氣を移し、自ら充足せしむれば則ち微病自ら去り、神氣乃ち常に復するを得。『新校正』に云ふ、按ずるに、『甲乙經』及び『太素』に云ふ、氣を足に移さば、字（やしな）はざる無し。楊上善云ふ、按摩は氣をして踵に至らしむるなり⁹⁴。

「その病のある処に按摩して、手をゆるめず、鍼を病のある処につけ、またそれを推さなければ、その人の神氣をして鍼の中に入れさせる…」とあり、ここでは按摩と鍼を連動させて治療していることがわかる。実際の治療もそのようにされていたのであろう。神氣を鍼の中に入れることに関しても按摩が重要な役割をはたしていたとわかる。

楊上善は、按摩は氣を踵（かかと）に至らせることだという。『莊子』大宗師に「真人之息以踵（真人の息は踵を以てす）」と、真人は踵で息をするという「踵息⁹⁵」のことがみえるが、楊上善は、そのことを意識しているのであろう。

南宋、程大昌（1123-1195）撰、『演繁露』卷九に、

按の字

醫に按摩法有り。按は手を以て病處を捏捺（ねつなつ）するなり。摩は之れを揉搓（ださ）するなり。字は當に手に従ふべければ、則ち其の書するに當に按と為すべし。『玉篇』手部に按の字無し、『廣韻』に按の字有り、却（かへ）りて才に従ふ、別に案の字を出だし、木に従ふ。注に曰く、「凡の屬なり」と⁹⁶。

これは、「按」という文字について考察したものである。「醫に按摩法有り」という言い方から始まり、「按は、手を以て病處を捏捺するなり。摩は之れを**揆搓**するなり」と、「按」と「摩」のそれぞれの文字に対して考察を加えている。「按」は病んでいるところを「捏捺」する。「捏」には、「こねる、にぎる、おさえる、ひねる⁹⁷」、「捺」には、「お、おさえる、おさえつける⁹⁸」の意味がある。「摩」は「**揆搓**」とされる。「**揆**」は、おさえる、おす、だが、『玉篇』読みは、うつ、たたく、である。「搓」は、もる、よる、である。つまり、おさえたり、ひねったり、たたいたり、ねじったり、といった動作をさすという。

興味ぶかいのは、『玉篇』には、「按」の文字はないこと、また『広韻』にはあるものの、手偏ではなく、手偏に似るものの意味の異なる「才」に入られているということである。

清、王夫之（1619-1692）撰『詩經稗疏』卷三には

手を以て抑へ之れを下にするを按と曰ふ。故（もと）より導引の法、之れを按摩と謂ふ⁹⁹。

とある。

手を用いて抑えることが「按」だというとし、「導引の法」では、「按摩」という。ここでは、「按摩」は導引の中に含まれるという解釈である。

乾隆十四年（1749）『御定醫宗金鑑』卷八十七、按摩法¹⁰⁰には、

按とは手を以て下へ往き之れを抑ふるを謂ふなり。摩とは、徐徐（おもむろ）に揉（も）み之れを摩（な）づるを謂ふなり。此の法は蓋し皮膚筋肉に傷を受け、但だ、腫ること硬く麻木（まもく）¹⁰¹にして骨、未だ斷折（だんせつ）せざるの者のみの為に設くるなり。或ひは跌撲閃失（てつぱくせんしつ）に因りて、以て骨縫開錯（こつほうかいさく）を致し、氣血鬱滯し、腫れと為り痛みと為るは、宜しく按摩法を用ふべし。其の經絡を按（お）し以て鬱閉の氣を通し、其の壅聚（ようじゅ）を摩（な）で以て瘀結（おけつ）の腫れを散らさしむれば、其の患（わずらひ）、癒ゆ可し¹⁰²。

とある。

ここでも、まず、「按」と「摩」に関して定義がなされている。「按」は手で抑える、「摩」は、おもむろに揉み、なでるとされている。また硬く腫れて痺れているが、骨折

にはいたらないもの、また、骨の縫合がずれて開き、気血が鬱滞り、腫れたり、痛む時に、按摩を用いるべきだという。

その理論として、経絡を按（お）して鬱閉の気を通じさせ、腫れているところを摩（な）でて、それを散らせば、患（わずらひ）が癒えるという。ここでも按摩は経絡の理のなかに組み込まれている。これは臨床の観点からの説明でもあるだろう。

なお「按摩」という語は仏教書にもみえる¹⁰³。

摘引

「摘引」に関しては、先にとりあげた『史記』扁鵲倉公列伝の中にみえる。ここでは、その部分だけ、再度とりあげて論じたい。

醫に愈拊有り、病を治すに、湯液、醴醢、鑿石、摘引、案扞、毒熨を以てせず…¹⁰⁴

ここでは、愈拊が治病に使用しなかった六種類の治療法（湯液、醴醢、鑿石、摘引、案扞、毒熨）の一つとして「摘引」があげられている。

「摘引」の説明は『史記索隱』にある。これも先にとりあげたので、該当部分のみとりあげる。

摘、音、九兆の反、按摩の法を爲すを謂ふ、天摘引身、熊顧鳥伸の如くするなり¹⁰⁵。

とみえる。

さきに考察したように、「天摘」の「天」は、身をくねらせること、「摘」は、まげる、ためる、である。「天摘」は、あえて訓読すれば、「天（くねら）せ摘（ま）げる」であろう。

「引身」は身を引くで、身体を引っぱることでであろう。さきに「導引をさしているのではないだろうか」と述べた。『索隱』では、「摘」は「按摩の法をなすことをいう」とある。「按摩」と考えれば、

「摘引」＝「按摩」≡「矯摩」

ということになる。

清、『康熙字典』弓部、引 古文 扞¹⁰⁶には、

『史記』扁鵲伝、**鑿石拈引**、註 按摩の法を爲すを謂ふ、**舂拈引**身、熊顧鳥伸の如くするなり¹⁰⁷。

とみえる。

『康熙字典』は『史記索隱』の説をそのまま紹介していることになる。

案杭・案拈・案抆

『四庫全書』所収『史記』扁鵲伝は、

湯液醴灑、**鑿石拈引**、案杭毒熨

同書の注釈は、

索隱…**杭**音玩、亦た謂按摩して身體を玩弄し調（ととの）へしむるを謂ふなり¹⁰⁸。

である。

『四庫全書』所収、唐、司馬貞『史記索隱』扁鵲伝は、

湯液醴灑、**鑿石拈引**、案**拈**毒熨

同書の注釈は、

…**拈**音玩、亦謂按摩而玩弄身體使調也。

…**拈**音玩、亦た按摩して身體を玩弄して調（ととの）へしむるを謂ふなり。

である。

「案杭」と「案拈」の二種類の表記がある。いずれも按摩して身体を玩弄させることだという。

発音は、「杭音玩」「拈音玩」といずれも、音は「玩」だという。「玩（がん）」は、『唐韻』『集韻』『韻会』『正韻』のいずれも「五換切（五換の切）」で「音翫（がん）」である。

ところが、「杭（こう）」については、『集韻』は「寒剛切」、『韻会』『正韻』は「胡剛切」で、ともに「音航（こう）」である。『唐韻』は「与航同（航と同じ）」である。

「杙（ごつ・ぐつ）」については、『唐韻』『集韻』『韻会』『正韻』は、みな「五忽切、音兀（ごつ）」であり、それとは別に『類篇』に「魚屈切、音嘔（ぐつ）」がある。

つまり、「杭（こう）」にしても「杙（ごつ・ぐつ）」にしても、いずれも「玩（がん）」とは発音が異なるのである。

発音が「玩（がん）」ということで整合性をもたせているのが、清、呉玉搢撰『別雅』である。これは『字書』である。

『別雅』卷四、游**扞**、游玩也（游**扞**は游玩なり）には、

『荀子』王霸篇、「游**扞**の修」、註に「**扞**と玩とは同じ」と。『史記』倉公、「**鑿石**¹⁰⁹橋引、案**扞**毒熨」、註に「**扞**を按摩と謂ふ、而して身體を玩弄（もてあそ）び、調（と）とのへしむるなり」と。今本、多く訛（あやま）り、杭に作り或ひは杙に作るは、皆な非、と¹¹⁰。

と、みえる。

『荀子』の「游**扞**の脩」の隋、楊倞の注釈は「**扞**と玩とは同じ」という。ここでは、『史記』扁鵲倉公列伝の文字をあらかじめ、「**扞**」に置き換えた上で、「**扞**」と「玩」が同じだとする説である。さらに今本（清、呉玉搢の目にした『史記』の版本）の多くが、文字をまちがえて、「杭」や「杙」としているのは正しくないという。論証の過程に、かなり強引なところがあるが、その推論には同意でき、「**扞**」であった方がわかりやすい。

つまり、「案杭」「案**扞**」「案**扞**（版本としては見つからない。『別雅』の推論による）」のいずれもが、「按摩」を意味するという事になる。

按摩

『黄帝内経素問』卷一、金匱真言論第四に「冬不按摩」とある。その唐、王冰の注釈は、

按とは按摩を謂ふ。**躡**とは**躡**（あ）ぐること捷（はや）き者の手足を舉動するが如きを謂ふ、是れ所謂、導引なり¹¹¹。

という。

ここでは、按は按摩、**躡**は導引という解釈である。**躡**は手足をすばやく動かすことだという。

明、張介賓撰『類経』卷十二、論治類、五方病治不同に、

中央は…、其の治、宜しく導引し躡を按（お）すべし、故に導引按躡は、亦た中央従り出づるなり¹¹²。

とみえる。

ここの注釈に、

導引とは、筋骨を揺らし肢節を動かし以て氣血を行（めぐ）らすを謂ふなり。按は捏（こ）ねて按（お）す也。躡は即ち陽躡、陰躡の義。蓋し谿谷、躡穴を推拏して以て疾病を除くを謂ふなり。病、肢節に在り、故に此の法を用ふ。凡そ後世、用ふる所の導引按摩の法、亦た中州自り出づるなり¹¹³。

とみえる。

「按」は「捏（こ）ねて按（お）す」ことだという。それに対して「躡」は「陽躡」、「陰躡」のことだという。

「陽躡」、「陰躡」は、『黄帝内経素問』卷十五、氣穴論第五十八にみえる「陰陽躡四穴」がそうである。

この説明は、王冰の注に、

陰躡穴は足の内踝の下に在り、是れを照海と謂ふ、陰躡の生じる所。…陽躡穴は是れ申脉と謂ふ。陽躡の生ずる所、外踝の下、陷（くぼ）む者の中に在り¹¹⁴。

とみえる。

両足にそれぞれ、「陰躡穴」、「陽躡穴」という陰陽の穴があるため、あわせて四穴ということになる。そのため、『黄帝内経素問』の本文に「陰陽躡四穴」と、わざわざ、「四穴」と付け加えられているのである。

つまり、『類経』の解釈は、「陰躡穴」、「陽躡穴」という鍼灸の「穴」を按（お）すことであり、「按躡」は「躡を按す」と読まねばならないのである。「穴名」と結びつけるのは経絡と結びつけるからであろう。

それに対して、明の呉崑は『黄帝内経素問呉注』で、

躡音喬、按は手もて按ずるなり。躡は足もて蹠（ふ）むなり¹¹⁵。

という。

つまり、ここでは、「按」と「躡」を「手按」と「足躡」というように、手足に分けて対比させて論じているのである。「按躡」という熟語を、そのように読むことは、すこし不自然な気がする。さきにみたように『黄帝内経素問』金匱真言論の「冬不按躡」の文章ができた時に、手で行う按摩だけでなく、足を使うものもあったのかどうかについては、よくわからない。しかし、呉崑の当時は、すでに手と足を使う方法があり、そのことから、彼はこのように読むべきだと考えたのかもしれない。

摩沙・摩拏

漢、劉熙撰、『釋名』卷三、釋姿容に、

摩沙は、猶ほ末殺のごときなり。手上下するの言なり¹¹⁶。

とみえる。

手、上下するというのは、手を上下させてさすることなのだろう。摩沙と末殺は音通であろう。文字の使い方からみて、インドあたりからの語の音訳のようにみえる。マッサージという語にも似る。これはインドあたりから広まったとされている。手、上下するというのは、手を上下させてさすることなのだろう。江靜波は「摩拏之」¹¹⁷をマッサージの語源とする。

『後漢書』薊子訓伝に、

後人復た長安の東、霸城に於ひて之れを見る、一老翁と共に銅人を摩拏す、相ひ謂ひて曰はく、「適（たま）たま此れを鑄るを見るのみ、五百歳に近し」と¹¹⁸。

とある。

薊子訓と老人が、銅人を摩拏（な）でながら、「これが鑄造されているところを見たよな。五百年ほど前のことになるかな」と懐かしむ様子である。「摩拏」は撫でるぐらいの意味であろう。

後漢、安息国の三藏安世高訳『仏説長者子懊惱三処経』卷一四には、

時に兒の夫婦、園中に遊行す。樹有り名づけて無憂と曰ふ。其の上に花有り、色甚だ鮮好、弱緋色の如し。婦、夫に語げて言ふ、「此の華を得んと欲す」と。夫便ち

樹に上り、爲に此の華を取らんとするも、樹枝細劣、即時摧折す。兒、便（すなは）ち地に墮（お）ち、斷絶して死す。父母之れを聞き、樹より墮ちて死するを知り、便（すなは）ち走奔（はし）りて趣（おもむ）く。母、其の頭を抱（いだ）き、父、兩脚を抱く。摩摯して瞻視（せんし）するも、永（とこし）へに絶へて蘇（よみが）へらず¹¹⁹。

とみえる。

この「摩摯」も身体をさすることだろう。このあたりまでの用例では、とくに按摩ということにはならないように思われる。なお、この話は、『法苑珠林』巻第五十二にもあり、最後の部分は、「兒、便ち墮ちて死す。父母之れを聞き奔りきて頭を抱く。摩摯、占視して永へに絶へて蘇へらず¹²⁰」とすこし表現が異なっている。

以上、「按摩」とその別称という形でまとめた。「按摩」という語ができる前にあった「折枝」については、その解釈にさまざまな可能性がある。またかりに「折枝」が「折肢」に通じ、肢体を折り曲げることだとしても、それはストレッチに近く、「按（おす）」や「摩（さする）」とは意味が異なっている。

小 結

本稿では、一、導引・按蹻、二、按摩法と巫術、三、兪拊、四、按摩とその別称、について考察した。統考、その二では、推拿について考察する予定である。

注

- 1 按摩の歴史に関する先行研究には以下のようなものがある。
 - 張有齋主編『中国按摩大全』天津大学出版社 1991
 - 北京按摩医院編『中国按摩全書』華夏出版社 1993
 - 丁季峰主編『推拿大成』河南科学技術出版社 1994
 - 周信文主編『推拿功法学』上海中医薬大学出版社 1994
 - 長尾栄一教授退官記念論文集刊行会編『鍼灸按摩史論考：長尾栄一教授退官記念論文集』桜雲会 1996
 - 王平主編『推拿』天津科学技術出版社 1997
 - 李学武主編『針灸推拿全書』科学技術文献出版社 1999

- 郭長青主編『爽身保健：中医靈効按摩術』北京体育大学出版社 中医診療法叢書 2000
- 藤林良伯『按摩手引』、1835
- 西村豊作「按摩法（續集）」順天堂医学 M19 (25)、25_10-25_13、1886
- 「按摩論（續集）」順天堂医学 M19 (37)、37_8-37_12、15、18、1886
- 高島文一「按摩理論」自律神経雑誌 10(10)、4-5、1963
- 塩満勝磨「導引・按摩の歴史的考察」武庫川女子大学紀要 人文科学編 (18)、133-143、1971
- 和久田哲司、和田恒彦、西條一止「『黄帝内経』からみた按摩療法」日本東洋醫學雑誌 50(1)、79-83、1999
- 陶恵寧「中国按摩の伝来と日本按摩の発祥」、日中医学 22(5)、26-29、2008
- 鈴木紀子「看護技術としての按摩術の歴史」医譚 = History of medicine : Journal of the Kansai Branch of the Japan Society of Medical History (99)、7237-7244、2014
- 和久田哲司「古代中国における手技療法の発祥と発展」日本東洋醫學雑誌 53(1・2)、71-75、2002
- 李強、笹田三郎「日本的按摩指圧療法的歴史沿革」推拿医学 6(2)、13-20、2004
- 2 書き下し文は黒板勝美編『訓讀 日本書紀』中巻 岩波書店、1931年、196頁を参照。原文は「三年春正月辛酉朔、遣使、求良醫於新羅。秋八月、醫至自新羅、則令治天皇病、未經幾時病已差也。天皇歡之、厚賞醫以歸于國」。
- 3 西暦何年にあたるのかは不明。干支を機械的に換算すれば414年になる。
- 4 武田祐吉訳注『古事記』、角川書店、1956年、允恭天皇。原文は「天皇初爲將所知天津日繼之時、天皇辭而詔之、我者有一長病、不得所知日繼。然、太后始而諸卿等、因堅奏而乃治天下。此時、新良國主、貢進御調八十一艘。爾御調之大使、名云金波鎮漢紀武、此人深知藥方、故治差帝皇之御病」。なお三木栄『朝鮮医学史及疾病史』思文閣出版、1991年、25頁に金波鎮漢紀武についての詳しい考証がある。
- 5 在位は539年?-571年?
- 6 『神道大系』、神道大系編纂会編、古典編6、神道大系編纂会、1981年、669頁。書き下し文は、この書物を参考にした。
- 7 吉川弘文館、1981年、285頁。
- 8 669頁の注に、「和薬の和は、大和國にて、薬は醫藥なり、大和國なる薬師の義にて職名なり、大和と云へるは、和泉和國に蜂田薬師などあるに對へての名」とみえる。

和薬は「大和の国の薬師」だという。

- 9 669頁の注に、「^(國、説カ)吳・主照淵は詳らかならず、もしくは音の同じきによりて梁主蕭衍を誤り傳へしか、六朝の世みな吳地に居るを以て、我國よりは推なべて吳と云ひしなるべく、^{キ、デヒコ}狭手彦の征討は梁の滅後六年ばかり過し時なれば、梁主の子孫韓地にありしが、狭手彦に従て歸化しにはあらざるか」とみえる。これによれば、南朝の梁あるいは、その滅亡後、子孫が逃れた韓をいう。
- 10 同上に、「智聰は、崇峻紀三年、出家の人を擧たる中に、善智聰と云へるはこの人にはあらざるか」とみえる。
- 11 同上は、大伴佐弓比古については、『日本書紀』宣化紀二年と二十三年の記事をあげる。その部分の原文をあげておく。「(宣化紀) 二年冬十月壬辰朔、天皇、以新羅寇於任那、詔大伴金村大連、遣其子磐與狭手彦、以助任那。是時、磐、留筑紫執其國政、以備三韓。狭手彦、往鎮任那、加救百濟」と「(欽明紀) 八月、天皇遣大將軍大伴連狭手彦、領兵數萬、伐于高麗。狭手彦乃用百濟計、打破高麗。其王踰墻而逃。狭手彦遂乘勝以入宮、盡得珍寶貨賂・七織帳・鐵屋、還來。以七織帳、奉獻於天皇。以甲二領・金飾刀二口・銅鏤鍾三口・五色幡二竿・美女媿媿、名也并其從女吾田子、送於蘇我稻目宿禰大臣。於是、大臣遂納二女、以爲妻居輕曲殿」。訓点は省略した。ここでは、「大伴佐弓比古」は「大伴連狭手彦」とされており、朝鮮からさまざまなものを持ち帰ったことが記されている。
- 12 同上に「内、外典の内典は佛經を云ひ、外典は儒書を云ふ、こは佛家にての稱をそのまゝに用ひたるなり、薬とは、本草薬方などの類か、明堂圖は醫疾令に、針生習素問黃帝針經、明堂三卷、脈決二卷、疏注經一卷、偃側圖一卷、赤烏神針經一卷、文云、赤烏神針經等經、即知亦有餘經、云々、(是は今の令は諸書によりて補へるものなるが、此の文は政事要略の十五と、考課令の集解によれるものなり)、と云へるもて明堂圖といふもの、大略を知るべし」とみえる。ここで薬は本草薬方のことで、明堂圖も、針や脈の医学書と並べられるものとの理解である。
- 13 「漢…和薬使主
出自吳國主照淵孫智聰也。天國排開広庭天皇(諡欽明。)御世。隨使大伴佐弓比古。持内外典。薬書。明堂圖等百六十四卷。佛像一軀。伎楽調度一具等入朝。向善那使主。天萬豊日天皇(諡孝德。)御世。依獻牛乳。賜姓和薬使主。奉度本方書一百卅卷。明堂圖一。薬白一。及伎楽一具。今在大寺也。」
- 14 李強：「中日両国古代按摩博士官位考」。中医文献雜誌 28(1)：43-45、2010
- 15 「按摩博士、一人、又置按摩師、按摩工佐之。教按摩生以消息導引之法、除人八疾、

- 一曰風、二曰寒、三曰暑、四曰湿、五曰飢、六曰飽、七曰勞、八曰逸。凡人支節腑藏、積而疾生、導而宣之、使内疾不留、外邪不入。若損傷折跌者、以法正之。」
- 16 堯の号。堯帝は初め唐侯に封ぜられた。のちに、天子となって陶を都としたところからいう。
- 17 『呂氏春秋』漢、高誘註、闕讀曰遏止之遏。
- 18 「昔陶唐氏之始、陰多滯伏而湛積、水道壅塞、不行其原、民氣鬱闕而滯者、筋骨瑟縮不達、故作為舞以宣導之。」
- 19 「吹呴呼吸、吐故納新、熊經鳥伸、為壽而已矣。此道引之士、養形之人、彭祖壽考者之所好也。」
- 20 「導引神氣、以養形魂、延年之道、駐形之術」。郭象註、成玄英疏：『南華真經注疏解經』第1-33。
- 21 「中央者、其地平以湿、天地所以生萬物也衆。其民食雜而不勞、故其病多痿厥寒熱、其治宜導引按蹻。故導引按蹻者、亦從中央出也。」柴崎保三：『鍼灸醫學大系：黃帝内經素問』。医道の日本、1980。「異法方宜論篇・第十二・第五節」より引用。一部改変した。
- 22 「導引、謂搖筋骨、動支節。按謂抑按皮肉、蹻謂捷拳手足。」
- 23 唐、貞元（785-805）と元和（805-820）の間の成立。釋慧琳撰、一百卷。
- 24 「凡人自摩自捏、伸縮手足、除勞去煩、名為導引。」
- 25 湖南省博物館、中国科学院考古研究所：『長沙馬王堆一号漢墓』北京、文物出版社、1973。
- 26 張家山二四七號漢墓竹簡整理小組：『張家山漢墓竹簡（二四七號墓）』北京、文物出版社、2006年第一期。
- 27 劉朴：「漢代竹簡『引書』中徒手治療導引法的復原及特徵研究」体育科学 30(9)：18-29、2010。
- 28 清、張志聰は「導引者、擊手而引欠也。」と注釈している。ここでの「引」は吸息する、「欠」は口を開けて呼息する、「擊手」は両手を高く挙げる、と理解されている。
- 29 邱茂良、主編：『鍼灸学』。上海科学技術出版社、1985
- 30 「疣、取敝蒲席若籍之蕪、繩之、即燔其末、以灸疣、末、熱、即拔疣去之。… 一、以月晦日下舖時、取塊大如雞卵者、男子七、女子二七。先（以）塊置室後、令南北（列）、以晦往之塊所、禹步三、道南方始、取塊言曰、今日月晦、磨疣北。塊一磨□。已磨、置塊其處、去勿顧。磨大者。」小曾戸 洋、他：『五十二病方』（馬王堆出土文獻訳注叢書）。東京、東方書店、2007年、p.58を参照したが一部改めた。

- 31 重刊宋本『十三經注疏』「附校勘記・緇衣第三十三」：「詩云白圭之玷尚可磨也（校：尚可磨也各本同石經同釋文磨作摩、按摩正字磨俗字）」。「子曰言從而行之節、尚可磨也（校：各本同石經同釋文磨作摩、按摩正字磨俗字）」。
- 32 傅維康：『中国医学史』。上海科学技術出版社、1984年
- 33 『周禮注疏』卷五、「岐伯榆拊則兼彼數術者」の唐賈公彥疏に「岐伯、榆拊則兼彼數術者、此二人在大古、如前說。但上神農、子儀、扁鵲、倉公、秦和等、各專一能、此二人兼上數術耳。」
- 34 『帝王世紀』：「(黃帝)又使岐伯嘗味百草、典醫療疾、今經方、本草之書咸出焉。」宋・林億『重廣補注黃帝內經素問』「表」：「求民之瘼、恤民之隱者、上主之深仁、在昔黃帝之御極也。…乃与岐伯上窮天紀、下極地理、遠取諸物、近取諸身、更相問難、垂法以福萬世、於是雷公之倫、授業傳之、而『內經』作矣。」
- 35 「是猶病者已倦而索良醫也。雖有扁鵲、俞拊之巧、猶不能生也。」
- 36 『周禮注疏』：「依『漢書』『藝文誌』、大古有岐伯、俞拊、中世有扁鵲、秦和、漢有倉公。若然、扁鵲在周時、倉公在漢世、此二人知氣色之候者也。」
- 37 人体にある九つの穴：口、両眼、両耳、両鼻孔、前陰、後陰。
- 38 「中庶子曰、吾聞中古之為醫者、曰俞拊。俞拊之為醫也、橛木為腦、芷草為軀、吹九竅定腦、死者更生。」
- 39 漢司馬遷撰、劉宋裴駟集解、唐司馬貞『索隱』、唐張守節『正義』：「『史記』「扁鵲倉公列傳」第四十五・扁鵲。
- 40 あまざけを指す。
- 41 石鍼・砭石。『説文』「金部」：「鑱、銳。」
- 42 薬のし、または罨法を指す。
- 43 膺穴を指す。
- 44 『史記索隱』の「揲荒、膏荒也」にしたがって、揲荒を膏荒と解した。『廣韻』の注に、「荒盲、心上隔下」とある。
- 45 『史記索隱』は「幕音漠、漠病也謂以瓜決之」。『史記正義』は以瓜決其闌幕也。隔は横隔膜を指す。
- 46 清朱駿聲『説文解字定聲』：「采、謂取膏盲入膈膜也。」故に、「爪」を「采(採)」と読んでもよい。
- 47 「醫有俞拊、治病不以湯液醴醢、鑿石拊引、案扞毒熨、一撥見病之應、因五臟之輸、乃割皮解肌、決脈結筋、搦髓腦、揲荒爪幕、瀉浣腸胃、漱滌五臟、練精易形。」
- 48 「又曰、吾聞、中古之為醫者曰俞拊、俞拊之為醫也、搦髓腦、束盲莫、炊灼九竅、

而定經絡、死人復為生人、故曰、**俞拊**之方、能若是乎。」

- 49 「扁鵲乃使弟子子陽厲鍼砥石以取外三陽五會○『韓詩外傳』曰、扁鵲入砥鍼厲石、取三陽五輸為先軒之竈、八拭之陽、子同藥、子明炙陽、子游按摩、子儀反神、子越扶形、於是世子復生。『周禮疏』曰、按劉向云、扁鵲治趙太子暴疾尸魘之病、使子明炊湯、子儀脉神、子術按摩。『說苑』作軒光之竈、八成之湯、『說苑』作子容搏藥、子明吹耳。」
- 50 「扁鵲遂為診之先、造軒光之竈、八成之湯、砥針礪石、取三陽五輸、子容禱藥、子明吹耳、陽儀反神、子越扶形、子游矯摩。」
- 51 「『索隱』、**鑱**音仕咸反、謂石針也。**拊**音九兆反、謂為按摩之法、**夭拊**引身如熊顧鳥伸也。枅音玩、亦謂按摩、而玩弄身體、使調也。毒髮謂毒病之處、以藥物熨帖也。」
- 52 「方技者、皆生生之具、王官之一守也。大古有岐伯、**俞拊**。中世有扁鵲、秦和。(師古曰、和、秦醫名也。)」
- 53 「拊、**拊**也。」
- 54 「**拊**者、摩也。古作拊**拊**、今作撫循、古今字也。」
- 55 台湾中央研究院『漢籍電子文獻資料庫』:「子／釋家／『大正新脩大藏經』(第五十一冊) 史傳部三・二〇八七・『大唐西域記』卷六、室羅伐悉底國。
- 56 「我今看汝、以手拊摩、病苦皆癒。」
- 57 本症は『靈樞』の中で「口喎」、「僻」、「卒口僻」と呼ばれている。『金匱要略』に「喎僻」、『諸病源候論』に「風口喎候」がある。宋代『三因極一病證方論』に下ると、始めて「口眼喎斜」という呼称が現れた。明『醫學綱目』は本症を「辰」と属し、その流行性を注目しただろう。この以降、各家の著作は多く、本症を「口眼喎斜」と稱える。
- 58 「卒口僻、急者目不合、熱則筋縱目不開、頰筋有寒、則急引頰移口、有熱則筋弛縱、緩不勝収、故僻。治之以馬膏、膏其急者、以白酒和桂、以塗其緩者。以桑鉤鉤之、即以生桑炭置之坎中、高下以坐等、以膏熨急頰、且飲美酒、噉美炙食、不飲酒者自強也、為之三拊而已。」
- 59 「**菑**川王病、召臣意診脈、曰、蹶上為重、頭痛身熱、使人煩懣。臣意即以寒水拊其頭、刺足陽明脈、左右各三所、病旋已。」
- 60 「曰、不為者與不能者之形何以異。曰、挾太山以超北海。語人曰、我不能。是誠不能也。為長者折枝。語人曰、我不能。是不為也。非不能也。故王之不王、非挾太山以超北海之類也。王之不王、是折枝之類也。」
- 61 「注、孟子為王陳為與不為之形、若是王則不折枝之類也、折枝、案摩、折手節、解罷枝

- 也。少者恥是役、故不為耳、非不能也。」
- 62 「臣宗萬按、『四書辨疑』云、枝與肢通。謂斂折肢體、為長者作禮。亦與徐行後長者、意類。蓋從爽疏、惟陸善經云、折草樹枝、不兼言木、正與罷枝意同、亦于易為義醒臣宗萬手。（『孟子注疏』卷一下考證、為長者折枝注案摩折手節解罷枝也。）」
- 63 「陸善經云、折枝、折草樹枝。」
- 64 「為長者折枝、以長者之命、折草木之枝、言不難也。」
- 65 白川静『字統』折、平凡社、1984
- 66 「舊說為長者按摩手節、此以枝為肢體之肢。字義本是。然所謂按摩手節者、事却迂僻、亦不可取。為長者屈折肢體、止是卑幼之於尊長常用、易為之禮貌耳。如斂手屈膝、折腰之類、皆其事長上之禮也。說者宜云枝與肢通用、折枝謂斂折肢體、如斂手折腰、為長者作禮也。此與徐行後長者、意正相類。皆言不難為也。」
- 67 「為長者折枝、古注以折枝為按摩、枝同肢體之肢。今朱注以為樹枝之枝、雖虛言取譬不難之意、尤為淺顯、但於為長者三字全無意義、似宜從古。」
- 68 「霸橋在長安東、跨水作橋、漢人送客至此橋折柳贈別。」
- 69 「折枝。陸氏善經謂折草樹枝。集注從之、與為長者。意殊不屬。趙氏注、按摩、折手節、解罷枝也。亦費力。陸筠云、枝肢古通用、謂磬折腰肢揖也。」
- 70 南宋、周必大撰『文忠集』卷五十三に、「陸氏翼孟音解序」という文が載せられている。
- 71 「立則磬折垂佩。」
- 72 「又手節曰枝。孟子為長者折枝。趙岐注、折枝、按摩手節也。」
- 73 「靜然可以補病、背城可以休老、寧可以止遽。」
- 74 「積也、詩曰、助我舉**擗**。**擗**頰旁也、从手此聲、前智切。」
- 75 「積也、从手此聲。詩曰、助我舉**擗**、一曰、**擗**頰旁也。」
- 76 「**擗**、手拔、又摩也、批也、揜也。」
- 77 「**揜**、謂鬢拔眉髮也。」
- 78 **擗**、按、**批**、疑同字。
- 79 後出の馬叙倫の説の中にみえる。
- 80 「『真誥』云、時以手按目四眚、令見光分明、是檢眼神之道、久為之、見百靈老形之兆、發於目眚。披**擗**皺紋、可以沐浴老容。」
- 81 明焦竑撰『莊子翼』卷六、外物篇の注にも同様の文が引かれている。
- 82 四つの眚（＝眚、まなじり）としたが、眚には目頭の意味もある。それも含めて四なのかもしれない。

- 83 「以手按目四眚二九過、覺令見光分明、是檢眼神之道、久為之、得見百靈。」
- 84 陶弘景は道教の学者であるが、道教と按摩は関連がある。晋、葛洪の『抱朴子』内篇、遐覽に「道經…甲乙經一百七十卷、青龍經、中黃經、太清經、通明經、按摩經、導引經十卷…」とみえ、『甲乙經』などととも『按摩經』が記されている。また後の書物になるが、『宋史』芸文志では、第一百五十八、道家類と第一百六十、医書類において、それぞれ「『按摩要法』一卷」と「『按摩法』一卷」が記されている。さらに按摩法は老君つまり老子により創られたという説すらある。仏典である『仏祖歷代通載』「隨代為帝王師偽」第十一化に「老君…説按摩通精經曰…（老君…『按摩通精經』を説きて曰く…）」とみえる。老子は実在の人物とは考えられておらず、起源説話である。しかし、そこでは老子が万物の創始者であるとされており、その論理の展開の中で、老子が按摩に関する書物を書いたとされているのである。陶弘景は本草書にも詳しく、医学にも造詣が深かった。按摩のことにふれてもおおしくはない。
- 85 「眚滅、又與**滅**通。按也摩也。『莊子』外物篇、眚滅可以休老。註以兩手按目之四眚、令眼神光明、按滅皺紋、可以沐浴老容。」
- 86 『莊子義証』、弘道文化事業有限公司、中華民國59年、730頁。
- 87 「『玉篇』引眚滅作**揃滅**。闕誤。引張君房本休沐。」
- 88 「陸德明曰、眚、本亦作**揃**、滅、本亦作**滅**、奚侗曰、眚、疑為**擧**之誤。『説文』、揃、**滅**、**擧**也。揃**擧**義同。因**擧**誤為眚耳。倫案説文曰、**滅**、**批**也。**批**當作**擧**。**擧**下曰、一曰、**滅**頰旁也。即借**擧**為揃、同齒音也。揃**滅**同義、『玉篇』曰、揃、**滅**也。**滅**、磨也。是揃**滅**即今按摩術也。成玄英疏曰、衰老之容、以此而沐浴。是成本休作沐。休字是。」
- 89 「扁鵲入、砥鍼礪石、取三陽五輪、為先軒之竈、八拭之陽、子同藥、子明灸陽、子**游**按摩、子儀反神、子越扶形、於是世子復生。天下聞之、皆以扁鵲能起死人也。」
- 90 「『黃帝岐伯按摩』十卷『唐六典』、按摩博士一人注、崔寔『正論』云、熊經鳥伸、延年之術、故華佗有六禽之戲、『魏文』有五**撻**之鍛、『僊經』云、戶樞不朽、流水不腐、謂欲使骨節調利、血脉宣通『韓詩外傳』、扁鵲砥鍼礪石、子游按摩）、『周禮疏』案、劉向云、扁鵲使子術案摩。」
- 91 『史記』卷一百五考証では「『韓詩外傳』曰、扁鵲入、砥鍼礪石、取三陽五輪、為先軒之竈、八拭之陽、子同藥、子明灸陽、子**游**按摩、子儀反神、子越扶形、於是世子復生」と詳しくなっている。
- 92 「形樂志苦、病生於脈、治之以灸刺。形樂志樂、病生於肉、治之以鍼石。形苦志樂、病生於筋、治之以熨引。形苦志苦、病生於咽嚙、治之以百藥。形數驚恐、經絡不通、

病生於不仁、治之以按摩醪藥。是謂五形志也。」

93 『字統』 醪、平凡社、1984

94 「按摩其病處、手不釋散、著鍼於病處、亦不推之、使其人神氣內朝於鍼、移其人神氣、令自充足則微病自去、神氣乃得復常。『新校正』云、按、『甲乙經』及『太素』云、移氣於足、無不字。楊上善云、按摩使氣至於踵也。」

95 石田秀実「踵息考」(坂出祥伸編『中国古代養生思想の総合的研究』平河出版社、1988)を参照。

96 「按字

醫有按摩法。按者、以手捏捺病處也；摩者、**掇**搓之也。字當從手、則其書當為按矣。『玉篇』「手部」無按字、『廣韻』有按字却從才、**別**出案字、從木。注曰几屬也。」

97 前掲『字通』「捏」の訓義を参照。

98 同「捺」の訓義を参照。

99 「以手抑而下之曰按、故導引法、謂之按摩。」

100 電子版『医宗金鑑』には接摩法とあるが、按摩のことが説かれている。

101 しびれのこと。

102 「按者、謂以手往下抑之也。摩者、謂徐徐揉摩之也。此法蓋為皮膚筋肉受傷、但腫硬麻木而骨未斷折者設也。或因跌撲閃失、以致骨縫開錯、氣血鬱滯、為腫為痛、宜用按摩法。按其經絡以通鬱閉之氣、摩其壅聚以散瘀結之腫、其患可癒。」

103 按摩に関する記述は、後秦(384-417)三藏鳩摩羅什譯『大莊嚴論經』卷十一、弗若多羅・鳩摩羅什訳『十誦律』(409)卷十一、求那毘地訳『百喻經』(492)卷三、『經律異相』(516)二一二二、隋(581-618)天竺三藏闍那崛多訳『佛本行集經』卷六十、唐、道世『法苑珠林』(668)卷三、北宋、道原『景德傳燈録』(1004)卷七にみえる。

104 「醫有俞拊、治病不以湯液、醴醢、**鑿**石、**拊**引、案**拊**、毒熨…」

105 「**拊**音九兆反、謂為按摩之法、天**拊**引身如熊顧鳥伸也。」

106 中華書局出版、1958、284頁。

107 「『史記』扁鵲伝、**鑿**石**拊**引、註 謂為按摩之法、天**拊**引身、如熊顧鳥伸也。」

108 索隱…杭音玩、亦謂按摩而玩弄身體使調也。」

109 ここでは手偏の「拊」ではなく、木偏の「橋」になっている。

110 「『荀子』王霸篇、游**拊**之修、註**拊**與玩同。『史記』倉公、**鑿**石**橋**引、案**拊**毒熨、註**拊**謂按摩、而玩弄身體使調也。今本多訛、作杭或作机皆非。」

111 「按謂按摩。**蹻**謂如**蹻**捷者之舉動手足、是所謂導引也。」

- 112 「中央者…、其治宜導引按蹻、故導引按蹻者、亦從中央出也。」
- 113 「導引、謂搖筋骨動肢節以行氣血也。按捏按也。蹻即陽蹻陰蹻之義。蓋謂推拿谿谷蹻穴以除疾病也。病在肢節、故用此法。凡後世所用導引按摩之法、亦自中州出也。」
- 114 「陰蹻穴在足內踝下、是謂照海、陰蹻所生。…陽蹻穴是謂申脉。陽蹻所生、在外踝下陷者中。」
- 115 「蹻音喬、手按也。蹻、足蹻也。吳崑注、孫国中、方向紅点校『黄帝内經素問吳注』学苑出版社、2001、黄帝内經素問名家評注選刊、18頁。」
- 116 「摩沙、猶未殺也。手上下之言也。『四部叢刊初編』※四庫全書本は、「手上下言之也」。
- 117 江靜波：漫談“推拿”与“按摩”。江蘇中医（12）：29-31、1961
- 118 「後人復於長安東霸城見之、與一老翁共摩拏銅人、相謂曰、適見鑄此而已、近五百歲矣。」
- 119 「時兒夫婦、遊行園中、有樹名曰無憂、其上有花、色甚鮮好、如弱緋色。婦語夫言、欲得此華。夫便上樹、爲取此華、樹枝細劣、即時摧折。兒便墮地、斷絕而死。父母聞之、知墮樹死、便走奔趣。母抱其頭、父抱兩脚、摩拏瞻視、永絕不蘇。」
- 120 「兒便墮死。父母聞之奔趣抱頭。摩拏占視永絕不蘇。」

※拙稿は、2016年3月6日（日）に京都大学人文科学研究所で行われた「東アジア科学技術史国際シンポジウム2016」〈第1セッション：伝統医療〉、李強・大形徹「中国按摩推拿医学の遡及的考察」にもとづく。